

目次

悪魔の死 5

殺人規則その三 103

トウモロコシとコロシ 207

女性を巡る名言集 303

訳者あとがき 309

主要登場人物

- ネロ・ウルフ……………私立探偵。美食家で蘭の栽培にも傾倒している
- アーチャー・グッドウイン……………ウルフの助手
- フリッツ・ブレunner……………ウルフのお抱えシェフ兼家政担当
- セオドア・ホルストマン……………ウルフの蘭栽培係
- クレイマー……………ニューヨーク市警察殺人課警視
- パーリー・ステビンズ……………クレイマーの部下。巡査部長
- ロークリッフ……………クレイマーの部下。警部補
- ソール・パンザー……………ウルフの手助けをする、腕利きのフリーランス探偵
- フレッド・ダーキン……………ウルフの手助けをする、フリーランス探偵
- オリー・キャザー……………ウルフの手助けをする、フリーランス探偵
- マルコ・ヴクッチ……………ニューヨークの一流レストラン（ラスターマン）のオーナーシェフ。ウルフの幼なじみ
- ロン・コーエン……………『ガゼット』紙の記者、アーチャーの友人
- リリー・ローワン……………アーチャーの友人

第一章

赤革の椅子は、ウルフの机の角から四フィート離れた位置にある。バッグからとり出した銃を机に置くには、立ちあがって一歩前に出なければならなかった。彼女は椅子に戻ってバッグを閉じ、ウルフに告げた。「その銃で、夫を撃ち殺すつもりはないんです」

ぼくはウルフから直角の位置にある自分の机に背を向けて座り、その様子を見ていたのだが、眉をあげた。芝居じみたまねをする女性だとは思っていないが、前日の午後、面会予約の電話をかけてきたときは、多少ぴりぴりしていた。当然だ。私立探偵事務所に電話をかければ、たいていそうなる。それでも感情に流されることはなく、細かい点を説明した。名前はルーシー・ヘイゼン、ミセス・バリー・ヘイゼン。住所はパーク・アベニューとレキシントン・アベニューの間の東三十七丁目。ネロ・ウルフに三十分間内密の話をしたい、それだけ。ウルフになにもしてもらおうつもりはない、助言さえ必要ない。ただ、話をさせてもらえればいい。その三十分、百ドル払うつもりでいる。必要であればもう少し払えるし、払うつもりもあるが、百ドルでお願いしたい。

依頼が十一月か十二月で、ウルフの所得が百ドル稼いでも正味二十ドルしか手元に残らない段階に達していれば、よほど特別な相手かよほど特別な用件でない限り、ウルフは面会を受けつけない。とはいえ、今は一月で、多額の報酬が入る見こみはなく、わずか百ドルでも西三十五丁目にある古い

褐色砂岩ブラッストーンの家の維持費、人件費の足しにはなる。ましてや、なにもしなくてもいいのだ。それで、面会は翌日、火曜日の朝十一時半に決まった。

十一時半きっかりに玄関のベルが鳴り、ぼくが迎えいれると、彼女はにっこり笑ってくれた。「ありがとう、面会の約束をとりつけてくださって」握手はお義理でもできるし、そっちのほうが普通だが、笑顔は別だ。男が会ったこともない若い女性から、自然で親しみがこもった、屈託のない笑顔を向けられるなんて、そうそうあることではない。気を引こうとするでも、畏をしかけるでも、挑戦的でもない笑顔。男にできるのは、同じような笑顔の持ち合わせがあればお返しをするくらいだ。彼女を事務所に案内して、ミンクのコートを脱ぐ手伝いをしながら、ぼくは世の中わからないと思った。バリー・ヘイゼンのような有名広告会社を経営する男のきれいな奥さんであっても、まっとうな感覚を持つていられるなんて。ぼくは会えてよかったな、と思った。

だから、芝居じみたまねをされたときは、がっかりした。女性が初対面の相手との会話の皮切りに、バッグからリボルバーをとり出し、夫を撃ち殺すつもりはないと言うなんてわざとらしい。あの笑顔を読み違えたに決まっている。間違いをしでかすのは好きじゃないので、もう会えてよかったとは思わなかった。ぼくは眉をあげて、唇をぐっと結んだ。

机の奥にある特大の椅子に納まっていたウルフは、銃にすばやく視線を向けて、客に戻し、唸った。「芝居じみたまねで」ウルフは言った。「恐れ入ったりはしませんよ」

「そんな」ミセス・ヘイゼンは言った。「あなたを恐れ入らせようとしていたんじゃないありません。話をしていただけです。そのために、あなたに話したいがために、ここへ来たんですから。銃を持参してお見せすれば、もっと……もっとはつきりするだろうと思ったので」

「結構。で、思ったとおりに行動したわけですか」ウルフは眉を寄せていた。「わたしに仕事を依頼したり、助言を求めるつもりはないそうですな。あなたの望みは、わたしに内密になにかを話したいただけだ。注意しておきますが、わたしは弁護士でも聖職者でもありません。わたしとの対話では、秘匿特権は認められないでしょう。犯罪について話すつもりならば、開示しないと約束はできません。重大な犯罪の場合ですよ、武器を許可なく所持するというような、つまらない犯罪ではなく」

「それは考えませんでした。武器の所持ですか」ミセス・ヘイゼンは軽く手を振って、片づけた。「心配なく。犯罪が起こったわけでもないし、起こるわけでもありません。そこが肝心なんです。わたしはその点を話すために来たのですから。その銃で、夫を撃ち殺すつもりはないと」

ミセス・ヘイゼンを見つめるウルフの目が、細くなつた。女はどいつもこいつも気が触れているか、悪魔のようにするがしこいか、もしくはその両方だというのがウルフの信条だが、その信条を裏付ける証拠がさらに増えたわけだ。「それだけですか?」と追及する。「三十分必要だとのことでしたが」

ミセス・ヘイゼンは頷いた。きれいな白い歯で唇を噛んだが、すぐにやめた。「そのほうがいいと思つたのです、ちゃんと説明したほうが……理由を。ここだけの話にしてくださいさるなら」

「さっきの条件でよければ」

「もちろんです。夫をご存じですか? バリー・ヘイゼン、広告会社の?」

「グッドウィン君が教えてくれました」

「二年前に結婚しました。わたしはバリーの顧客の一人、発明家のジュールズ・コーリーさんの秘書でした。わたしの父、タイタス・ポステルも発明家で、五年前に亡くなるまでコーリーさんとお付き合いがあつたんです。バリーと出会つたのは、コーリーさんの事務所でした。心から愛していると

思いました。何度も何度も見極めようとしてきたんです、あの人と結婚した本当の、嘘もごまかさない理由を。わたしはただ望みのものを……」

ミセス・ハイゼンは言葉を切り、唇を噛んだ。蠅を追い払うように、激しく頭を振る。「ウルフさんたら」と声に出す。「いえ。わたしつたら、だめね。あなたはすべてを知る必要はないんです。同情を買いたくて、余計なことまでしゃべっているのはわたし。主人を殺したい理由だって、教える必要はないのに」

ウルフはほそほそと答えた。「あなたの三十分間ですから、マダム」

「夫を憎んでるわけじゃありません」また頭を振った。「軽蔑してるんだと思います、いえ、そうにちがいありません。それでも、離婚はしてもらえなくて。ですから、家を出ようとしました。実際に家出をしたんですけど、主人はああいう……わたしつたら、同じことを！ なにもかもしゃべる必要なんてないのに！」

「お好きなように」

「好きで話しているんじゃないやありません、ウルフさん。必要だから話すのです」

「では、どうぞ必要なおりに」

「話す必要があるのは、こういうことです。主人は寢室の引き出しに銃をしまっています。今、目の前の机に置いてある銃です。わたしたち夫婦の寢室は別です。ある考えを抱いていながら、急に心の表に出てくるまで、自分ではその存在に気づいていない状態、おわかりになりますか？」

「もちろんです。潜在意識は墓場ではなく、ため池のようなものです」

「でも、なにがたまっているか、本人にはわかりません。わたしにはわからなかった。一か月ほど前

のクリスマス翌日、わたしは主人の寢室に行き、銃を引き出しから出して、弾が入っているかどうかを確かめたんです。入っていました。そして、気づいたら考えていたんです、ベッドで寝ている主人を撃つのはなんて簡単だって。『ばかね、本当におばかさん』と自分に言い聞かせて、銃を戻し、引き出しには二度と近づきませんでした。でも、その考えを頭から追い払えないんです。思い巡らしているんです。ことに、眠ろうとしているときに。おまけに、だんだん泥沼化してきて。つまり、主人が寝ているときに忍びこんで銃をとって撃つどころか、捕まらないためにはどう実行したらいいかと計画を練りはじめていたんです。ばかな考えなのはわかっていますが、やめられませんでした。どう、しても！　そしてある晩、ほんの二日前の日曜の夜、わたしは全身を震わせながらベッドから起きて、お風呂場で冷たいシャワーを浴びながら立ち尽くしていました。うまくいく計画を思いついたんです。内容までお話しする必要はないでしょう」

「お好きなように。必要なとおりにどうぞ」

「どちらでもかまいません。ベッドには戻りましたが、寝つけませんでした。寝ている間ににかしでかすのではと思つたわけではなく、自分の心がなをしでかすのか不安だったんです。自分の心を抑えきれないとわかっていましたので。それで昨日の午後、いやでもあきらめられるように、封印しようとしたんです。計画をだれかに洗いざらい話してしまえば、その計画は使えなくなりません。計画が使えなければ、捕まることはありません。友人、本当の友人ではだめです。逃げ道が残るでしょうから。もちろん、警察に話すわけにはいきません。教会には行っていませんので、懺悔する神父もいません。それで、あなたのことを思いついて、電話で面会の約束をとりつけ、ここにいるわけです。話はずみましたが、あと一つだけ。万一主人が撃ち殺されるようなことがあれば、わたしがここに来

たこと、話したことを警察に教えると約束してほしいんです」

ウルフは唸った。

ミセス・ヘイゼンは指をほどき、胸を張って、大きく息をした。口を閉じたまま吸いこみ、口を開けて吐き出す。「さあ！」一言続けた。「以上です」

ウルフは客をじっと見つめていた。「わたしは話を聞くためだけに雇われたわけですが」そして、告げた。「一つお断りしておかなければならない。あなたの計略は自己抑制としては有効ですが、仮にだれかがご主人を撃つたらどうするのですか？ 今の話を警察に教えたとします。あなたは苦しい立場に追いこまれるでしょう」

「やっていなければ、大丈夫です」

「くだらん。間違いなく、困ったことになります。すぐに犯人が明らかにならない限りは」

「やっていなければ、かまいません」ミセス・ヘイゼンは手のひらを上にして、片手を差し出した。「ウルフさん。あなたに話すと決めて面会の約束をしたら、一か月ぶりにぐっすり眠れました。だれも主人を撃つたりはしません。約束していただきたいんです、わたしが撃てないように」

「約束にこだわらないほうがいいと思いますが」

「どうしても必要なんです。ちゃんと自覚していなくては！」

「結構」ウルフの肩が四分の一インチ上下した。

「約束してくれますか？」

「はい」

ミセス・ヘイゼンはなめし革の大きなバッグを開け、小切手帳とペンをとり出した。「現金より、

「親切手にしておきたいんです」と言う。「そうすれば、記録が残りますから。かまいませんか？」

「もちろん」

「グッドウィンさんには、百ドルとお話ししました。それで足りませんか？」

ウルフは結構だと答え、ミセス・ヘイゼンはバッグの上に小切手帳置いて記入した。立ちあがって手渡してもらおうのも悪いので、ほくから近づいて受けとった。が、ミセス・ヘイゼンはバッグを閉じて結局は立ちあがり、椅子の背からコートをとろうとした。そこにウルフが声をかけた。

「他にご用があれば、お時間がまだ十分残っていますよ」

「いえ、ありがとうございます。昨日グッドウィンさんには、あなたに話をしたいだけだと言いましたが、実際は少しちがいましたね。今、気がつきました。わたし、約束してもらいたかったんですね。本当に感謝しています、もうこれ以上……いえ、あと十分っておっしゃいました？」ミセス・ヘイゼンは手首をちらっと確認して、ほくを見た。「ぜひ蘭を拜見したいのですけど……駆け足でもかまいません。どうかしら、グッドウィンさん？」

「喜んで」ほくは本気でそう答えたが、ウルフが椅子を引いた。「十分間付き合う義務があるのはグッドウィン君ではなく、わたしです」そして、巨体を持ちあげた。「一緒にどうぞ。コートは必要ないでしょう」ウルフはドアに向かった。ミセス・ヘイゼンは曖昧な笑顔を一瞬ほくに向けて、あとを追った。廊下にあるエレベーターの開閉音が聞こえた。

不満はなかった。この古い褐色砂岩の家の屋上にある温室三つ分、一万株の蘭は、ウルフのもので、ほくのじゃない。ウルフは蘭を見せびらかすのが大好きなんだ。あの蘭が自分のものだったら、だれだってそうなる。ただ、ウルフが割りこんできたのは、そのせいじゃない。ウルフには何通か口述す

る予定の手紙があったが、蘭を見せにぼくを屋上へ行かせたら最後、いつ戻ってくるかわからないと考えたのだ。何年も前、ろくな証拠もないのに、ぼくは魅力的な若い女性と一緒にいると時間を忘れると、ウルフは決めつけた。いったんウルフが決めたのなら、もうそれで決まりなのだ。

電話が鳴った。ぼくは自分の机でとった。「ネロ・ウルフ探偵事務所。こちらはアーチャー・グッドウィンです」ウルフのレシピに従ってソーセージ造りをしているニュージャージーの男から出荷の可否の確認だったので、厨房のフリッツにつないだ。免許を持った私立探偵の暇つぶしにはあれこれ嗅ぎまわるのが一番だと、ぼくはミンクのコートを手にとった。ラベルは「バーグマン」で、調査は不要と判定して、椅子に戻す。次に、ミセス・ヘイゼンが夫を射殺する凶器にするつもりのない銃をとりにあげた。ドレクセルの三二口径。きれいに手入れをされている。弾倉にはすべて弾薬が詰まっていた。市中を持ち運ぶ許可を持たない女性には、無用の長物だ。小切手も調べた。イーストサイド銀行で、ルーシー・ヘイゼンのサインがある。これは金庫に入れた。腕時計をちらっと確認して、正午のニュースを聴こうとラジオをつけた。聴きながら、立ったままのびをする。アルジェリアは大騒ぎだ。スタテン・アイランドでビルを建設している業者は、政治家からの便宜の供与を否定している。フィデル・カストロはキューバ国民に、アメリカ政府の役人たちはごくつぶし（ぼくの言い換え）ばかりだと言いつけている。そして、

「今朝、マンハッタンのロワー・ウエストサイド、ノートン・ストリートに面したビルの間の小路で、男性の死体が発見されました。死亡したのはバリー・ヘイゼンさん。背後から撃たれ、死後数時間が経過していました。詳しい状況はまだわかりません。ヘイゼンさんは有名な広告会社の顧問でし

た。国会で、民主党首脳クラスが中心的な問題としてとりあげる決定を――」

ぼくはラジオを切った。

第二章

ほくは銃をとりあげて、銃口と銃身の臭いを確かめた。無意味とはいえ、自然な行動だろう。銃が最近発射されたかどうか知りたときには、つい臭いを確かめてしまうものだが、発射されたばかり、三十分以内でかつ掃除の機会がなかった場合でなければ意味はない。立ったまま手のなかの銃をじっと見ていたが、結局、自分の机の引き出しにしまった。ミセス・ヘイゼンのバッグは赤革の椅子に置いてあったので、開けて中身を出してみた。(「バグマン」のミンクのコートを着ている女性が持ち歩きそうなものばかりで、それ以上の収穫はなかった。ほくはまた銃を出して、弾薬をとり出し、拡大鏡で調べてみた。そのうちの一つ、あるいは二つかもしれないが、他のものより新しく光っているものはないだろうか。どれも似たようなものだった。銃を引き出しに戻すと、エレベーターの降下する音、ずしんとという着地の音、扉の開く音がした。ミセス・ヘイゼンを先にして、二人が入ってきた。ミセス・ヘイゼンは赤革の椅子からバッグをとりあげて、ウルフの机に向き直り、次にほくのほうを向いた。

「銃はどこ？」と訊く。「持って帰ります」

「事情が変わったんです、ミセス・ヘイゼン」ほくは彼女の目の前に立った。「ラジオのニュースをつけたら、一報が……聞いたとおりに繰り返します。『今朝、マンハッタンのロワー・ウエストサイ

ド、ノートン・ストリートに面したビルの間小路で、男性の死体が発見されました。死亡したのはバリー・ヘイゼンさん。背後から撃たれ、死後数時間が経過していました。詳しい状況はまだわかっていません。ヘイゼンさんは有名な広告会社の顧問でした」そうニュースで言っていたんです」

ミセス・ヘイゼンの目が飛び出しそうになった。「そんなの、う、う、う、う」最初から言い直した。「そんなの、嘘よ」

「そうじゃありません。本当のニュースです。ご主人は射殺されました」

バッグが手から床へと滑り落ち、顔が強張り、血の気が引いた。青くなった人は見たことがあるが、こんなに完全に、こんなに一瞬で真っ青になるのは、はじめて見た。ふらつきながら一歩さがったミセス・ヘイゼンの腕をとり、赤革の椅子へ座らせた。ウルフは部屋の真ん中で立ちどまっていたが、噛みつくように命じた。「なにか持ってこい、ブランデーだ」

ぼくは動きかけたが、ミセス・ヘイゼンが制した。「わたしなら大丈夫。本当のニュースなの？」

「そうです」

「主人が死んだ。死んだの？」

「はい」

ミセス・ヘイゼンは両手を握りしめてこめかみに押しあて、何度も叩いた。「わたしは厨房にいる」ウルフが背を向けて出ていこうとした。原因がなんであれ、ショック状態の女性はウルフにとつては単なる発作中なのであって、絶対に我慢できないのだ。が、ぼくは声をかけた。「待った。すぐによくなりませうから」ウルフは戻ってきて、ミセス・ヘイゼンを見おろし、一声唸ると、自分の椅子に腰をおろした。

〔著者〕

レックス・スタウト

本名レックス・トッドハンター・スタウト。1886年、アメリカ、インディアナ州ノーブルズヴィル生まれ。1906年から二年間、アメリカ海軍に下士官として所属した。数多くの職を経て専業作家となり、58年にはアメリカ探偵作家クラブの会長を務めた。59年にアメリカ探偵作家クラブ巨匠賞、69年には英国推理作家協会シルバー・ダガー賞を受賞している。75年、死去。

〔編訳者〕

鬼頭玲子（きとう・れいこ）

藤女子大学文学部英文学科卒業。インターカレッジ札幌在籍。札幌市在住。訳書に『四十面相クリークの事件簿』、『ネロ・ウルフの事件簿』全3巻、『ロードシップ・レーンの謎』（いずれも論創社）など。

ネロ・ウルフの^{さいなん}災難 ^{じょなんへん}女難編

——論創海外ミステリ 226

2019年1月20日 初版第1刷印刷

2019年1月30日 初版第1刷発行

著者 レックス・スタウト

編訳者 鬼頭玲子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1767-5

落丁・乱丁本はお取り替えいたします